



秋元雄史がゆく、九谷焼の物語

LIBRARY

## 絵付けを生かすかたち 受け継がれる九谷のろくろと型打ち

第三話

九谷焼の華やかな絵付けが活きるのは、それを支える素地の美しい造形があってこそ。「ろくろ形成」のスペシャリストとして三代続く「アズマ製陶所」と、全国的にも数少ない「型打ち形成」の担い手・宮腰徳二さんを訪ねました。

「LIBRARY 秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」とは

長い歴史に育まれてきた九谷焼の「技」は、いかに生まれ、今後どのように変化していくのでしょうか？KUTANism総合監修・秋元雄史が自らその現場に足を運び、ナビゲーターと対話をするなかで、九谷焼を再発見していく連載シリーズ。

Starting out as raw pottery stone, they are painted, and eventually served at traditional ryotei restaurants. Just how exactly did such Kutani ceramics come to be, and come to be used? Through this mini-series, rediscover the origins and evolution of Kutani ceramics, with KUTANism supervisor Akimoto Yuji as your on-site guide.

WEB版はこちら





## #03

### 絵付けを生かすかたち 受け継がれる九谷のろくろと型打ち

KUTANism全体監修・秋元雄史が自ら現場に足を運び、ナビゲーターと対談をするなかで、九谷焼を再発見していく連載シリーズ「秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」。2021年度は“技法”と“伝承”をキーワードとして、九谷の魅力を、系譜を紐解きながら探っていきます。

華やかな絵付けに注目が集まることの多い九谷焼ですが、絵が活きるのは、それを支える素地の美しい造形があつてこそ。第三話は九谷焼の“技法”に注目し、成形の基本である「ろくろ形成」のスペシャリストとして三代続く「アズマ製陶所」と、全国的にも数少なくなっている「型打ち形成」の担い手・宮腰徳二さんを訪ねます。九谷焼の花形である絵付けにバトンを渡す重要な役割を果たしている二軒への取材を通じて、職人技の奥深さを知ります。

## 目次

---

- ✓ 産地からの要望に技術で応え続けて66年  
愚直にろくろと向き合い、職人に徹する
- ✓ 時間をかけて技術を身につけ、生きた素地をつくる。
- ✓ 型打ち形成の名門で修行をし、独立
- ✓ 職人として技術を守り、魅力を伝えることに使命
- ✓ 絵付け作家にバトンをつなぎ、作品の可能性を広げる。
- ✓ この回のまとめ

### 産地からの要望に技術で応え続けて66年 愚直にろくろと向き合い、職人に徹する

---



閑静な住宅街の一角にある事業所。



## 案内してくれた人

### 東 剛太郎さん

1941年生まれ、小松市出身。子どもの頃から創業者である父・東豊重さんの仕事をそばで見て学び、35歳で父親の事業を継ぐ。現在は息子の万寿夫さんが代表を務める。

秋元： まずはアズマ製陶所が設立した背景を教えてくださいませんか。

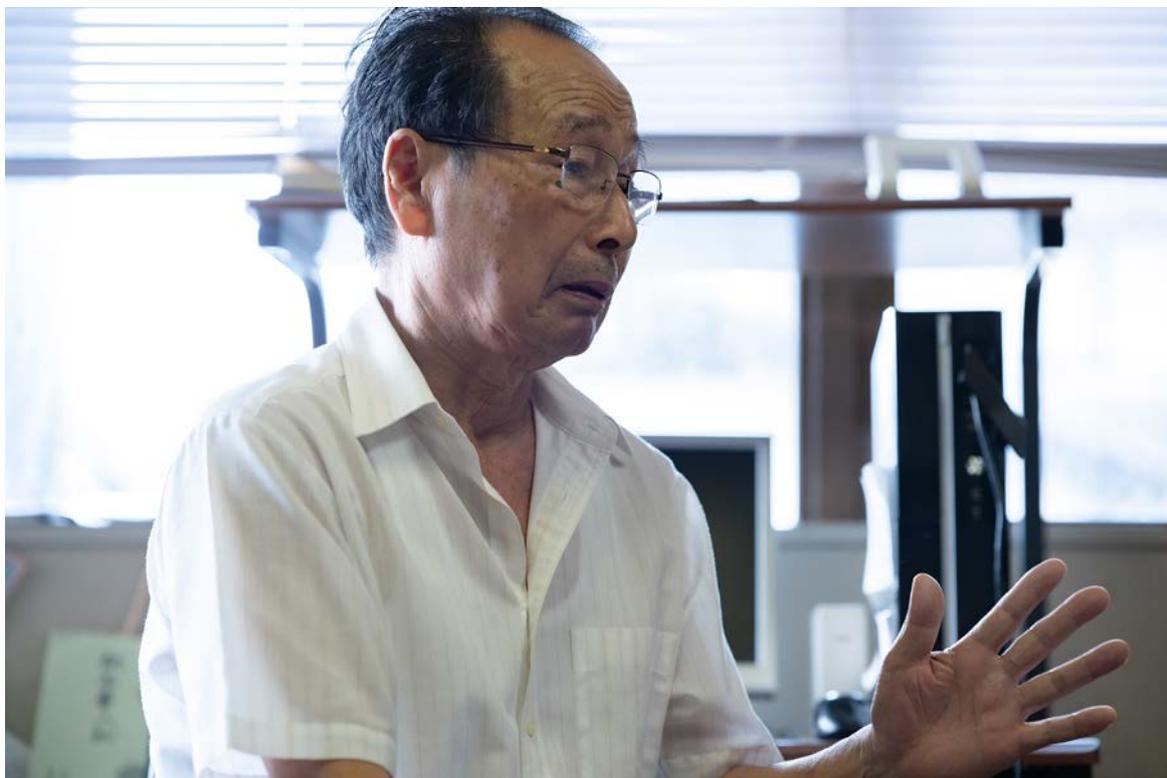
東： 父が1955年に設立しました。親の時代は九谷焼の大きい窯元がこの辺りに10軒近くあったかな。そこへ、ろくろを引ける人が職人として行って稼いでいたんやね。その頃は一つの窯元に留まって長いこと続けるという働き方ではなくて、職人氣質で好きなきに好きなきところへ行って、ろくろを回していた。私の親も職人だったから京都で修行して小松に帰ってきて、それからここを立ち上げた。今とは全くシステムが違うよね。昔の職人は好きな時間に働いていた。仕事早い人は5、6時間して帰るとかね、そういう時代やった。

東： 父親からは「やるときは一生懸命やって、長居するな」って言われとった。仕事にかかったら一生懸命やる、そして自分の思う数が作れたら、あとは遊べと。まあ、今そんなことをしとったら生活できないけどね。私は10歳くらいのときからろくろをやり始めてね。父は私に教えてくれたわけじゃないから隣で作業を見てね、真似するうちにどうにか引けるようになった。



秋元： 当時の賃金(給料)はどのように決まっていたのでしょうか。「一枚引いたら何円」という感じですか？現代で言えばフリーの職人さんみたいな方がたくさんいて、仕事単位で窯元で仕事をしていた感じなのでしょうか。

東： そうや。これだけ引いたらいくら貰うという、そういう時代やった。そこで交渉や。昔は窯元とか商人で、ものすごく力を持った人がいたから。それが合わなければ他のところに行く、それだけや。



秋元： 先代は自分で会社を起した方がいいだろうということで、会社を立ち上げたのでしょうか？発注はどのように来ていたのですか？

東： 親とすれば、全然自信はなかったと思うよ。当時は石炭窯でしょう。今はガス窯だからちょっと慣れればできるけど、昔は窯焚きでみんな失敗していたの。一晚中窯を確認してね、大変やった。仕事は元々つながりがあった問屋さんからもらっとったね。問屋さんは全国に販路を持っていて、わしらは素地を作って何軒かの付き合いのある問屋さんに引き取ってもらって。

秋元： なるほど。そこで直接、上絵付けする職人さんへ渡るといったことはないんですね。

東： わしらは生地だけ作って問屋へ納めて、問屋が抱えている絵描きに渡している。そういうシステムになっていた。今もその方法は変わらないけど、最近はギフト関係がゼロやから昔の面白みはないわね。親から聞いた話やけど、昔は問屋が商品を見ないうちから「ひと窯分買う」って注文を入れる、そんなこともあった。一番良い時にはギフト関係でトラックにスイカを積みたいにして運んだ時代があった。問屋が北海道から九州まで全国に得意先を持っていて、そこへ出張して販売してくる。そのシステムがすごく良かった。

秋元： 豪快だなあ笑。作れば作るほど売れた時代だったんですね。よく売れる時期が続いたのはいつ頃までなのですか？

東： 窯元にもよるんやけど、厳しくなってきたのは2000年に入ったくらいからかなあ。



事務所にはサンプルとして皿や香炉、一輪差しなど様々な商品が並べられている。

秋元： 従業員は何人いらっしゃるのですか？

東： ろくろ引いてるいるのが2人、私もたまに引くけど。あとは釉薬かける人が3人やね。うちはろくろ成形だから、鑄込みの型ではできないこと、もう色んな形の依頼を引き受けとる。せっかくの依頼を、できないって言いたくないいや笑。1000までいかんでも、だいたい多くの種類がある。急須なんてのは厄介で、本体と口と手と別々に作らないといけない。香炉なんかも手間がかかるね。

秋元： ろくろじゃないと引けないような仕事もあるけれど、鑄込みや他の方法でも作れるものでも、ろくろで作っているということですね。ろくろを引き始めてから納得のいくものを作れるようになるには、どれくらいかかったのでしょうか？

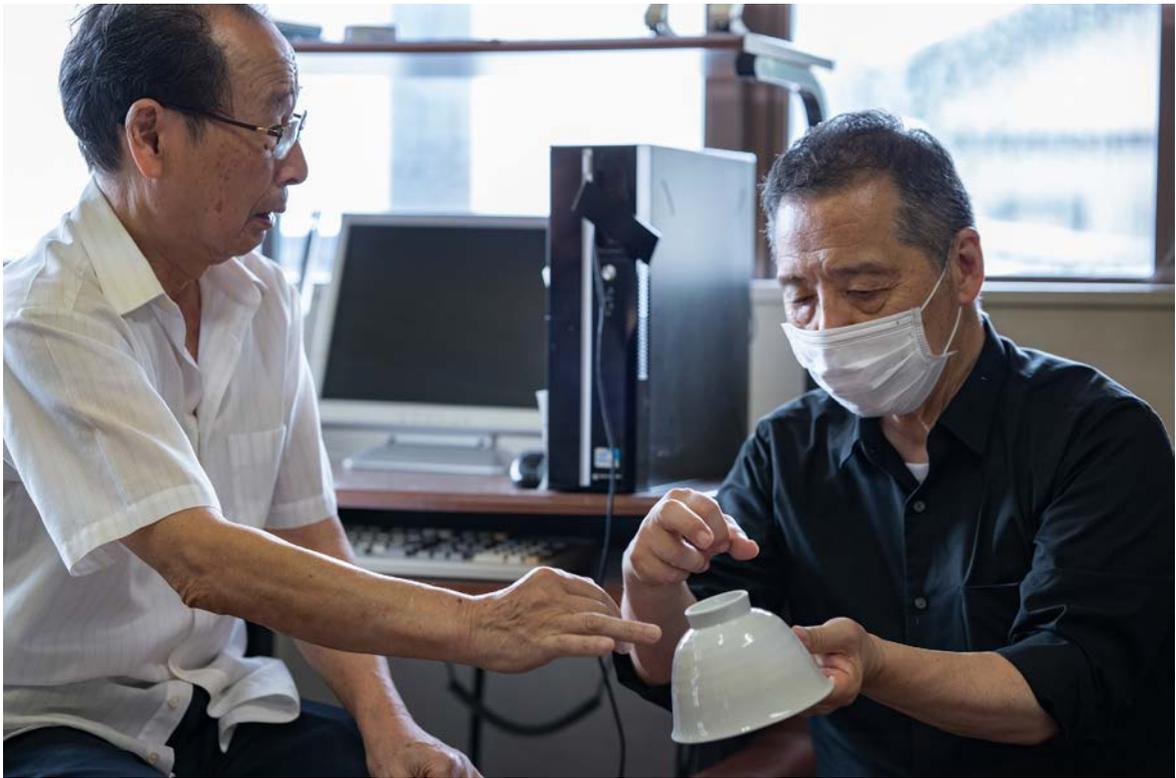
東： 5、6年経ってからかな。そんなときでもやっぱり、苦手な形もあったよ。同じ形でも大きさによって難しさが全く違うからね。慣れるまでが難しい。よく技術を持っている人が「10年かかった」とか言うでしょ。あれはやっぱり、一定の技術に到達した人しか言えんね。それだけやらなきゃ自信持って受けられないもの。だからこの仕事は難しいんや、すぐには一人前になれんもん。

秋元： ずっとろくろを引かれてきて、一番印象に残っている仕事はありますか？

東： 今は楽しいよ、これだけ歳取ったら。けど仕事に関しては、ただつらいことばかり。窯を焚くのも成功すれば嬉しいけど、成功しなければがっかりするやろ。ろくろも引いたものの、納得しなけりゃ面白くないやろ、だから楽しいということはあまりなかったな。楽しいのは好きなことをやってるときだけ。こういう仕事は、それが当たり前なんよ笑。

秋元： 仕事のなかで特に得意なものは何ですか？

東： わしらは磁器やから、上品さや。生きた仕事をお客様に提供する。素地を薄くして、上品な感じで仕上げる。高台を丁寧に削る。そうやって丁寧に作っているとね、焼き物に詳しくない人でも手に取っただけで分かる。売れていくのは、そういうものなんや。



「高台周りを見れば、その人の仕事分かる。私に言わせりゃ“生きた感じ”ですよ。生き生きしたもの。それにすごくこだわるとる。親にもやかましく言われたんや」。

秋元： ろくろを引くときに気を付けていることはなんですか？

東： 皿を引くときはすごく神経を使うね。やっぱり粘土をしめるのが大事。しめるというのは、粘土を押し殺す。粘土を圧縮すること。例えば花瓶があるでしょう。慣れてきたら、しゅーっと形作って終わりや。でも、そういう時にはだいたい乾燥してヒビ割れるからね。なんでかと言うと、土をしめていないから。



東 : 一番大事なことは、土殺しという粘土を均一にして引きやすくするための工程や。ろくろは同じようにして引いても、焼き上がったときに、ゆがむ人とゆがまない人がいる。歪む人は土殺しが全然足りていない。

秋元 : 引き方一つでずいぶん変わるんですね。土殺しという工程は、次世代に伝えられているのでしょうか。

東 : 基本中の基本だけど、最近はその知らないで一丁前になる人もいるかな。

## 時間をかけて技術を身につけ、生きた素地をつくる。

---



石川県立九谷焼技術研修所を卒業後、アズマ製陶所に入った金丸涼花さん。取材時は鉢の制作に励んでいた。

秋元 : こんにちは。東製陶所に入って、どれくらい経つのでしょうか？

金丸 : こんにちは！私は九谷焼技術研修所を出たのですが、卒業後にすぐここに入り一年になります。

秋元 : 何か目標や夢があってアズマ製陶所に入られたのでしょうか？

金丸 : やっぱり素地を作る人がかなり減っていて、そんななかで自分の作品を作るのも大事やなって思うんですけど、生地を提供できるような職人さんも絶対おったほうがいいなと思って。もともと作家志望だったんですけど、職人になるためにここへ来ました。

秋元 : ろくろの職人ってどんどん減っていますもんね。ここに来てから学んだことは何でしょうか。

金丸 : 東先生から、よく「生きた素地にしなさい」と言われます。それは本当に大切だと思っています。もちろん時間をかければ薄くて軽いものは作れるんですけど、やっぱり仕事なので。そこが難しいと思いますね。



剛太郎さんの息子、万寿夫さん。現在アズマ製陶所の代表を務める。

秋 元： ろくろを引いて何年くらいになられるのですか？

万寿夫： 20歳の頃に始めて25年くらいになります。子供の頃からろくろを触ったから、自然な成り行きで。

秋 元： お父さんから習われたということですね。親子で仕事するというのは、難しいものなのでしょうか？

万寿夫： そうですね、やっぱりいやでしたね笑。

秋 元： 自分の思うようにろくろを引けるようになるには、どれくらいかかりましたか？

万寿夫： 最近ですかね。20年以上続けてきて、ようやくです。技術云々よりは気持ちの問題ですね。気持ちに技術が付いてくる感じはあります。なんというか雑念がなくなって、平常心でろくろと向き合えるようになりましたね。



ろくろを引くときは「平常心を心掛けている」という。



ろくろ形成に欠かせない道具の「だんご」と「へら」は手作り。

東： これは形を整えるために使う道具やね。大まかな形を作る「だんご」と最終的な仕上げで使う「へら」があって、作りたい形によって色んなものがある。



香炉だけで100種類以上はくだらないという。

秋元： すごく心地よい空間ですね。仕事をする上で難しさはありますか？

東： やっぱり一回一回仕上がるものが違うよね。そこが難しさでもある。ちょっと横着なことをするとモロに焼き上がりが出てくるからなあ。とにかく長いこと続けていたら、初めはものすごく下手でもだんだん力が抜けて楽しくなる。その時期がいつ来るかは分らんけど。ただ最終的には、こうやって続けてみて楽しいと思うね。



東 : だからな、なんでも覚えようと思ったら、やっぱり我慢や。嫌とか好きとか言っていられないでしょ。やっぱり会社のためにと考えたときに、自分の代になってはじめて真剣になるというかね。

秋元 : 先代から家業を継いだのは何歳の頃だったのでしょうか？

東 : 私が35歳ほどのときに自分のやり方をしたくて、強制的な感じやけど変わってもらって。そのことについて親はとやかく言わなかった。



東 : 子どもの頃から父のそばで見て、こうしたらいいんじゃないとか分かるでしょ。だから譲ってもらった。自分なりのやり方で色んなことをやらせてもらって。職人としての経験を積んでいたから、これだけ腕についていたら、もう逃げていかんわね。

秋元 : 代替わりや東さんの経営について、お父さんから口を出されることは無かったんですか？

東 : なかったですね。

秋元 : やっぱり、本当に職人さんだったんだなあ。



型打ち形成の名門で修行をし、独立  
職人として技術を守り、魅力を伝えることに使命

---



自宅を改装した工房。土間を仕事場にし、窯を設けて、居間は展示室として利用している。



案内してくれた人

宮腰 徳二さん

1973年、小松市生まれ。1991年から21年間、加賀「妙泉陶房」で山本篤氏に就き、薄手生地の型打ち形成を学ぶ。2006年伝統工芸士認定「九谷焼成形部門」。2012年独立。日常に花を添えられるような器づくりを目指し、妻の綾さんと二人で工房を営む。

**秋元：** まずは型打ち形成について基本的なところから教えていただけますでしょうか。

**宮腰：** 九谷の粘土は曲げたり変形したりするのに適しているんですね。型打ち形成というのは技法自体が難しいということもありますが、粘土の質によってできたりできなかったりするものですから、日本全国で作れるわけではないんです。近年ではほとんどが鑄込み形成になっていますね。今、型打ちをしているのは個人作家くらいじゃないかな。



一番奥が、形成して焼く前の状態。真ん中は素焼き後、手前は釉薬を塗って再度焼成し完成したものの。

**秋元：** ろくろで引いてから型に当て込む際に、まず粘土が重要ということですね。ちなみに粘土の製造方法で言えば、スタンパーで作った粘土であれば、どの産地(陶石)であっても作れるということでしょうか？

**宮腰：** 粘土の粘り気にも関係してくるので、やはり九谷の陶石であることも重要です。九谷の土にも多少のぶれ幅があるので、そこは他産地のものを入れて調整していますが、メインは九谷の土になります。粘土の配合は付き合いのある二股製土所さんをお願いしています。



**宮腰：** 型打ち形成の良いところは、鑄込みと違ってものすごく軽く作れるところなんです。鑄込み形成のように粘土をぎゅっと圧縮したりしないので、器を持っていただければ分かると思いますが、びっくりするほど薄いでしょ。

**秋元：** ほんとだ！

**宮腰：** ここが大きな違いなんです。ただ、型打ち形成をいまだに続けている人は本当に少ないですよ。おそらくですが全国で10人も居ないのではないのでしょうか。そのなかでも九谷はまだ残っている方です。やっぱり手間多いということもあり、ろくろ形成や鑄込み形成よりも価格が高くなってしまいうんですよ。他と比べて軽いか色々なこだわりはあるのですが、それを工芸の魅力として知ってもらえることが、なかなか難しいと思います。

**秋元：** 手仕事の良さを細部まで意識して、ちゃんと見てもらえるかということですよね。日頃は一日に何個くらい作っていらっしゃるのでしょうか？

**宮腰：** 形にも寄りますが、一日に50個も作ると疲れちゃいますよね。ある程度、数を多く作ることができれば少しでも値段を安くできるので、そこは意識しています。

**秋元：** 注文の受け方はどのようにしていらっしゃるのでしょうか。完全なオーダーメイドよりも、ある程度、宮腰さんの方で形を用意しているのですか？

**宮腰：** そうですね。型から作ると3ヶ月くらいかかってしまうので、基本的には、ある中から選んでいただいています。昔は注文の単位が100個だったので、オーダーメイドの注文もありましたよ。問屋さんから「こんな形はできる？」って新しいデザインを頼まれることもありましたね。



型打ち成形技法だからこそ成せる、複雑な形が魅力。

**宮腰：** こうやってろくろを引いて、型に沿わせて形作ります。変形が可能なので四角にしたり五角や八角にしたり、そういうこともできるのが型打ち形成です。型に当てて上からさらしを巻いて細かく線を付けていきます。形ができたら自然乾燥させて、翌日に高台を削り出して、その後、最後に仕上げをします。ですから、一日にろくろで50個作ったとしても、乾燥して削って、どうしても時間がかかってしまいますよね。

**宮腰：** 型打ち形成って「型があるから簡単なんじゃないの?」と言われる方も結構いらっしゃるのですが、そうではなくて、型にあった形を、いかにろくろでしっかり作れるかというのがとても難しいんですね。大きすぎても小さすぎてもダメで。厚さを均等につくれる技術というのが、すごく重要になってくるんですよ。



型打ち成形の手順。まず型の大きさに合わせてろくろを引き(左上)、型(右上)にろくろで引いた生地をかぶせ(左下)、上からなぞりながら型の模様を浮き上がらせる(右下)。

**秋元：** ろくろで引いたものが型に合わないといけないんだもんね。宮腰さんはこの道に入って何年になられるのでしょうか?この技法を自分なりに納得できるようになるには、どれくらい時間がかかりましたか?

**宮腰：** 丸30年になります。習得するまでに10年はかかりましたね。今でも失敗することはあります。数ミリ厚すぎたなって作り直すこともありますよ。やっぱり、いつまで経っても難しいですよ。「ちょうどいいバランス」が分かるようになったのは独立してからでしょうか。僕の場合は職人として素地を九谷の作家さんに提供するし、作家として、白磁や青磁とかで販売することもあるので。やっぱり自分が納得できないとね。

**秋元：** 自分の作品にも力を入れていますね?

**宮腰：** やはり業界が厳しくなってから、自分で動かなくてはならなくなったのが大きいですね。作家さんが自らデパートの売り場に立つとか。そういう人が増えてきました。



**秋元：** 素焼きの型も、ご自身で作っていらっしゃるんですよ?

**宮腰：** はい。仕上がり大きさを計算して、内側の形をイメージしながら作っています。よく「あと5mm大きくしてほしい」と言われることあるんですけど、そう簡単ではないんです笑。微調整をするには、もう一つ新しい型を作らなきゃいけない。それも石膏で作っているわけではないから、そんなに簡単じゃないんです。

秋元： 初めて型のことを知ったときに石膏かと思ったのですが、素焼きで作っているというのが面白いですね。

宮腰： 石膏型も悪くはないのですが、使い続けるうちに、だんだんすり減ってしまうんですね。土の場合は、僕が聞いた話なんですけど300～350年前からそのまま残っているものもあるそうで。割れない限り、ずっと残っているんです。廃業された工房には、お宝のように眠っているけど、それを使う人がいないというのが勿体ないですね。僕の師匠の山本篤さんは、役目を終えた型の命を吹き返すことができないかという取り組みをしておられます。なかなか継承って難しいですよ。だから、うちみたいに作る人間がいかに根性出してがんばれるか、というところですよ。

秋元： この技法の価値が分かる人を増やすことが大切ということですね。時代が変わって工業化が進み、あらゆるものが数値化できるようになってはいますが、焼き物の場合は山から持ってきた石から始まるわけですから、自然が持つ揺れ幅みたいなものがあって面白いと感じています。現代は様々なものが電子化や数値化されていたり機械化されたりしているので、多くの人が正確無比なものが良いと考えがちですけど、基本的には工芸作家さんがもっている技術って、経験値の幅のなかで、どういう風に表現するかっていうことじゃないですか。一番重要なところは決して数値化できないんですよ。

## 絵付け作家にバトンをつなぎ、作品の可能性を広げる。

---



秋元： 宮腰さんが型打ち形成の道に進んだきっかけは何だったのでしょうか？

宮腰： 昔は焼き物がどうやってできるかも知らなかったんです笑。師匠のもつでゼロから教わりました。僕は中卒で、卒業後はお好み焼き屋で働いていたんです笑。焼き物の進んだきっかけは手に職をつけたかったから。僕の親が妙泉陶房の山本篤さんにご縁があって、18歳のときに弟子入りさせてもらいました。この仕事は本当に難しいですよ。頭ではなく、身体で覚える仕事なので。今でも難しいですが、その難しさが面白かったんでしょうね。難しく、完璧を求めたくて続けているみたいな。なんだろう、常に上を目指すじゃないですけど、やっぱりこう「もっと良いものを」というのは常に思っているんで続けられるのだと思います。

秋元： そういう風に思えるということは、宮腰さんに向いていたのでしょうか。向上心を持って上を目指すことができるのは、仕事に対する充足や達成感のようなものがあつたんですね。

宮腰： 九谷の場合は、食器は食器の職人、花瓶は花瓶の職人、小さい器専門、大きい器専門、というくらいに細かく分業していて、何でもできるという人はなかなかいないんですね。でも僕は、小さい盃から大きい花瓶まで、いろんなものを作れるようになりました。

秋元： ご自身としては自分のことを工芸作家と考えるのですか？それとも職人でしょうか。

宮腰： 職人です。私の師匠・山本篤さんも職人。作ることを怠けないというか、そこは絶対なんですね。だから評価されるんだらうと思います。



すべてオリジナルの型。現在150ほどがあるという。

秋元： なるほど。職人として生きていく中で、最後は自分の窯を構えたいということで独立されたのでしょうか？

宮腰： 僕の場合は、もともと独立心というのはなかったんですけど、40歳になったときに、そろそろ自分でやってみようと思って独立したんです。

秋元： 宮腰さん自身のお仕事についても教えて下さい。ご自身の作品として世の中に出すことも積極的にされていますね。

宮腰： 僕たちにできることは、型打ち形成という技法をいかに多くの人に知ってもらおうかということに尽きると思います。まずは、この技法の付加価値を知っていただきたい。僕自身、まだまだ勉強段階ではあります。グループ展に参加したりテント市などに出店したり、イベントに合わせて新しい作品を作ったり、色々と挑戦してはいますが。



宮腰さんの作業スペース。日々、黙々と粘土と向き合う。

**秋元：** 宮腰さんが仕事をする上で大切にしているこだわりは何でしょうか。

**宮腰：** 自分で型を作り、ろくろを引いて制作しているので、全ての作品がオリジナルというところですね。ゼロから考え完成まで持っていきます。アイデアは花や草、水など、自然から得るようにしています。造形のラインとか、全体のフォルムを大切にしているんです。僕は絵が分からないので、作家さんに素地を提供して、その先はお任せしていますが、絵付け作家さんたちは丁寧に描いてくれるひとが多いので、気持ちよくやりとりができますね。やっぱり素地を提供するからには大切に扱ってほしいという気持ちがあります。

**秋元：** 長く付き合いが続いている業者や作家はどれくらいいらっしゃるのでしょうか？

**宮腰：** 個人の方ばかりですが、全国で30人くらいかな。地元の方もいるし京都や神奈川など、各地においでになります。絵付け作家さんも、職人のことを理解して絵を付けてくれているように感じます。一つひとつを、すごく大事にしてくれるんです。「1+1」を3にも4にもしてくれる、そんな人とお仕事していければいいなあと思っています。僕らの仕事って、分かる人にしか分かってもらえないんですよね。

## この回のまとめ

---

分業化が進んだ九谷の制作現場で、今回は素地をろくろで成形する「アズマ製陶所」の東剛太郎さんと、型打ち技法で成形する宮腰徳二さんに話をお聞きした。九谷焼といえば絵付けが花形だが、絵付けを上手く見せるために、まずはその下地である素地の焼物が良いものでなければならない。一口に「良い」といってもその姿は様々であり、制作方法も異なる。芸術性を追求すると同時に生産性も考慮に入れなければ仕事にならないが、その塩梅が難しい。二人の話をお聞きしつつ、高度な職人技術の何たるかを学び、同時に九谷焼の分業についても改めて考える機会になった。

個性を生み出す技法

Techniques for creating individuality



## 九谷焼の芸術祭

# KUTANISM

主催：クタニズム実行委員会 共催：小松市、能美市 協力：石川県九谷窯元工業協同組合、石川県陶磁器商工業協同組合、九谷上絵協同組合、九谷団地協同組合、公立小松大学、こまつKUTANI未来のカタチ、小松九谷工業協同組合 後援：北国新聞社、認定NPO法人趣都金澤

クタニズム実行委員会事務局

〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地(小松市役所観光文化課内) Tel: 0761-24-8130 Mail: info@kutanism.com



クタニズム

<https://kutanism.com>